二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

ORION HEART オリオンハート

混沌のスター水セーラー戦士

小説 神楽陽子　挿絵 さえき北都

登場人物紹介
Characters

朝霧 優夏（あさぎり ゆか）

明るく快活なスポーツ少女。勇者オリオンの力を継承しているオリオンサンズに変身する。

有珠宮 葵（うずみやあおい）

優夏のクラスメート。名家のお嬢様で、趣味は読書と手芸。オリオンムーンに変身する。

ギルダート

破壊兵器「魔王スコーピオン」の復活を企むブラックキャッスルの首領。

アイン

ブラックキャッスルの幹部。ギルダートの命を受けオリオン戦士を追い込む。

クローネ

ブラックキャッスルの幹部。秘かにギルダートに好意を抱いている。

Act.1 オリオンの美少女戦士 007
Act.2 奪われたクリスタル 072
Act.3 暗黒の城で 136
Act.4 魔性の嫉妬 176
Act.EX 執行する者たち 249

『Act.2　奪われたクリスタル』より

「さあ、ショータイムの始まりだよ。すぐキーワードを喋りたくなるさ」
アナルの奥で変化を感じた。卵の質量が急激に膨張して腸内容積を圧迫する。
「あっんふ！　ふ……ひや、で……でちゃうぅッ⁉」
言葉を終えるより先に糸のような触手が一本、ニュルンと菊花を飛び出した。内側からの奇襲に括約筋が出遅れたところを、二本、三本としならせ、狭穴を突き破る。
本来なら一度の排泄に一回きりであるはずの、肛門開放の悦びが、たった一息の間に連続し、心ならずもオリオンムーンは腰をぶるぶると震わせた。
「あ……あ、んぁはああ……！」
悦痺れが直腸から脊髄へと突き抜け、反り喘ぐ爪先の下で分銅が不安定に宙をかく。十本を越えた細い触手は「おしべ」のように妖しい花を肛門に咲かせ、わしゃわしゃと捕食動物のようにうねり、先端から粘性の雫を滴らせた。
セーラー戦士の髪をかきまわしたら、先端を折り返して再びアナルに頭を戻し、狭穴の窄まりを束になって出入りする。
ズチュンッ！　ズチュッ、ズチュズチュズチュ！　ズチュッ！
「うぁはあ⁉　あっむ、うく……あ、ひぁあ！」
「そいつはとにかく汚いモノが大好物でさあ……」
ムーン本人の腸液と魔物の体液が混ざった潤滑油を、小道に馴染ませ、排泄器官を貪り

尽くす。のみならず紐触手は肉付きのよい太腿にも絡まり、白タイツに生臭い汁を染み込ませた。スクール水着の裏でも網目状に這い上がる。

「キーワードを教えてくれるまで、ずっとこうだよ？　有珠宮さん」

腸内に潜伏する魔物を本体に、触手は繁殖を続け、盛り上がるほど拡がった肛門から二十本と溢れた。束ねると赤子の腕ほど太くなり、無茶な拡張に穴がひりつく。

「あふ！　き……気持ち、悪ぃ……な、なにを……ひぁぐ！」

細長い触手はふくよかな豊乳へと脇から忍び寄り、半透明になるまで色の落ちた薄生地を舐めるように這って、果肉の麓を括らせた。

シュルシュルと縦横無尽に走って女体を複雑に緊縛する。そのうえ。

「――あぐう！　ま、待って……くっ、んふぁああ！」

柳腰に巻きついた数本が少女を真下に牽引し、クロッチを挟んで秘裂と三角木馬の角を擦り合わせるのだ。オリオンムーンはアナルを無限に駆け抜けていく快感と、ヴァギナで高まる電圧に悶絶し、顔を必死に振り上げて喘いだ。

「ひやっ、ら……らめ、こんな……んあッ！」

木馬を横に逸れたクリトリスが硬くしこって、激しい疼きで小さな存在を主張し、牝の白濁を湧き立たせる。愛蜜のとろみが太腿をぬらりと濡らす。

スクール水着は汗と魔物の体液によって粘性を帯びた。色を失ってもヌラつく潤沢だけ

は残り、濡れ姿は、単純な裸を上まわる淫猥さに拍車をかける。
ビンビンにしこって痛痒を訴える乳芽も触手に擦られ、本人が求めずとも肉体は牝の渇きを満たしていく。
肉膜の煮立った直腸でも触手は細かく蠢いて、痺れるような快感を叩き込まれた。
「ひぁぁっぷ……ひぐ！　おっ、オひリ……ぃや、あっんくふぅううう！」
肩肘を強張らせて手錠をかち鳴らし、狂おしげに腰を捻って悦がり、いやいやと首を左右に倒して肛悦に抗う。しかし抗っても抗っても、快楽は強くなる一方で、気力は疲労を重ねるばかり。
蕩けるような肉悦は甘美な波紋を広げて、肉体を屈服させ、脳にも小波を寄せた。
（オシリが……めっ、捲れてしまいますわ……！）
魔物の汁でぬめ光るスクール水着と、香汗にまみれた半裸のお尻。目にも官能的な少女の発育ぶりを味わうかのように、触手が胸の果肉とムッチリとした太腿に蔓を伸ばし、女肉が括れるまできつく締め上げる。水着は得体の知れない粘液で表も裏もドロドロだ。
オリオンムーンは熱っぽく瞳を潤ませ、息を継ぐのも精一杯。眉を八の字に倒し、緩みきった唇の端から涎を零す。
「んぐぅ、だめれす……動いちゃ、や、っんくぁはああ」
横に並んだアインが羽山の顔のまま囁いた。

「吐いちゃいなよ？　キーワード」
この熾烈な性拷問から脱することができるのなら、という考えが脳裏をよぎった。敗北は決まったも同然かもしれない。それでも美少女戦士は決して屈さず、美貌を自分の涎で汚すような醜態を晒しながらも、懸命に戦い続ける。
託されたキーワードを唯一の力にして。
「ぜっ、たぃに……教えません！　優夏ちゃんと、はぁ、約束……したんですッ！」
睫毛の下から橙色の瞳で敵を睨む。どのような窮地に追い込まれようとも諦めるわけにはいかなかった、絶対に。
（優夏ちゃん……私は、諦めません。何があっても諦めませんから……！）
親友との約束だ。アオイ＝ウズミヤ、アキラメナイデ。
「まったく、強情だね……仕方ないなあ」
進まぬ尋問に辟易したらしいアインが壁の一方、ムーンの真正面を指さした。
壁がガコンと上に開く。その先はガラスで仕切られており、オリオンムーンはこの部屋が二層構造であることを知った。
そして、視界に飛び込んできた光景に声を失う。
「――――！」
仕切りガラスの向こう側にはオリオンサンズが吊るされていた。そのうえ彼女は、蜘蛛

の巣にでもかかったかのように身体中で粘性の糸を引いて、赤いセーラー服も、紺色のスクール水着も、汚らしい白濁まみれ。
下品な性欲のはけ口にし尽くされた無残な姿だ。
気絶しているのか、オリオンサンズは頭を垂らしたままピクリとも動かない。
「……そ、そん……な……」
「手遅れだよ、オリオンサンズはボロボロさ。君が屋上でのんびりしてる間に――」
アインを無視してムーンは切に叫ぶ。
「優夏ちゃん！　うぐっ、優夏ちゃん⁉　起きてください、はあ、私です！」
それを遮って、舌打ち交じりにアインがムーンの前髪を掴み上げた。
「シカトするなよ、有珠宮さん！　大切な話の途中だろ？」
付きあっていたとはいえキスのひとつもしたことはない。初めて間近で見る男子生徒の顔は、卑怯で、低劣で、残酷だった。
彼のどこに惹かれたのか。
「成績はいい割におめでたい頭だね、有珠宮さんは。自分が朝霧さんを裏切ったとも知らないで。おかしいと思わなかったのかい？　朝霧さんの様子」
「な……なんの、ことです……？」
会話の間は触手が止まり、美少女戦士に耳を澄ませるだけの余裕を許す。

「朝霧さんもね、僕のことがずっと好きだったんだ」
まさか。そのようなことは考えもしなかった。
「けどね、有珠宮さんがこっそり僕を横取りしたりするから、朝霧さん、すっかり疑心暗鬼になっちゃって……傑作だね、その結果がアレさ。フフフ……アハハハハ！」
アインの嘲笑が反響する。見るに堪えない親友の姿から視線を真下に落とし、ムーンは愕然と瞳を慄かせた。
「そ……それじゃあ、優夏ちゃんは……」
三角関係など意識すらしなかった。交際を始めたと明かした時の、優夏の無理な笑顔が脳裏で鮮明に蘇る。その意味を理解するには遅すぎた。
アインから容赦ない侮辱を浴びせられる。
「最低だと思わないか？　友達のことは忘れて自分だけ舞い上がってた挙句、その友達をこんなにされてる間も、男と一緒にいた女なんて――」
「ち、違います！　私は……わた、しは……！」
大粒の涙を零さずにいられなかった。惨めなくらいぼろぼろと。
「何が違うのさ、説明してみなよ優等生！　君のせいで朝霧さんはああなったんだろ⁉」
アインの、罪人を軽蔑するような眼と罵声が少女の心を打ちのめす。
（優夏ちゃん……ごめんなさい、ごめん……なさい……！）

葵は今にも泣き崩れそうになった。
にやつく魔族が耳打ちする。
「本当は朝霧さんのことなんてどうでもいい……それが君の本音なんだよ。だったらケツの中のモノ、朝霧さんのオシリに移しちゃっても君は全然平気……だろ？」
強迫の言葉が胸に食らいついた。
「や！　……やめて、そんな……ひ、ひどいこと……」
辱められるのが自分ならば耐えられる。だが、それが親友の身となれば。しかも優夏は失神して完全に無抵抗だ。
「朝霧さんで遊ぶのも面白そうだよ……こんな風にさ！」
アインが指を鳴らすと同時に触手の大群が一斉に蠢きを再開する。
「あっあはぁああ⁉」
尻の穴深くに潜んだ魔物は結腸孔まで触手を伸ばし、直腸そのものを波打たせた。肛門では異物の出入りが頻繁で、腸粘膜は富士壺のように裏返り、濁った汁をしぶかせる。体外でも肉の紐が何重にも交差して、豊満な肉体を苛烈に縛り、締め上げた。
「ひやあっ、あふう！　だめ……ぃや、あっんふぁ！」
「次は朝霧さんでこうするんだ！　アッハッハ！」
魔物の体液が肛門から溢れ、スクール水着の半分剥けた尻を汚す。苦しいえずきを繰り

返し、無念の涙を呑みながらオリオンムーンは口を開いた。
「やめて！　あっぁぐ、い……いひます、キーワードを、言いますから……んひぃあ！」
とめどなく肛悦を打ち込まれながら、涙声で。
「き……ひぃ、ワードは、あ……あさ、ひり、ゆか……負けないで、んぐぁ、キーワードは、アサギリ＝ユカ……マケナイ、デ……です……！」
すでに敗北した戦友の前では虚しすぎるキーワード。アサギリ＝ユカ、マケナイデ。傍のアインがガラスの向こうを指しておかしそうに大笑いする。
「アーハッハッハッハ！　面白いよ有珠宮さん、そのキーワードは傑作だ！」
ここまで陵辱に耐えた意地も水泡に帰す。
そのうえ残酷な男は、こちらがキーワードを白状しても性拷問は終わらせず、むしろ魔物は勢いを増して美少女戦士のアナルを貪り抜いた。約束が違う。
「せめてものお礼だ、そのままケツの穴でイかせてあげるよ！　ハハハ！」
「そっ、そんな――あひぃいいいいッ！」
群れる触手が肛門に集中して、肉粘膜を穿り返し、深いところまでかきまわす。
体外でも肉蔓は真下に垂れ下がって、鎖分銅をしきりに揺らし、肉の割れ目と三角木馬の接点に裂けんばかりの重圧を加えた。
女壺が湯気立つ甘露を湧かせる。過熱する肉体は悦びの波紋に騒いで総毛立ち、汗腺を

決壊させて淫ら汗をダラダラと垂れ流す。
「やめ、もぉ……ひはぐ、もう、やめてくだ、さ……あむふぅううう！」
「なに言ってるのさ？　すごく気持ちよさそうなカオじゃないか」
オリオンムーンの頬は赤く色づいて、唾液を呑み下すよりも湿った呼吸を優先し、涎を唇の両端に走らせてさえいた。トパーズ色の瞳はとろんとして、弛緩した眉は目尻にかかり、表情がまったく締まらない。
「ひぁう、違うの……こんな、んあ、お……オシリが、あっぅあ」
知らず知らず葵は自ら腰を揺すって、ウサギ跳びで跳ねるように悶え、木馬の角を桜色の淫肉に深くめり込ませた。
リボンでひと括りにされたミッドナイトブルーの髪を波打たせ、腰を曲げてはスクール水着をギュウッと搾り、生地にも肌にも玉の汗を大量に浮かせる。
「ひやっあぐ！　んふ、あくふぅッ！」
触手は薄生地の裏を這って体液を巡回させ、柔らかな胸の麓を縛り、しこった乳芽を脇に向けて牽引した。セーラー服の襟からも裾からも肉の蔓は飛び出し、スクール水着の脚を通す穴から垂れた数本はタイツに潜っていく。白い生地が粘液で透明になる。
セーラー服だけを残して、色彩的には裸同然になった肉体が、ヌラヌラと淫靡な潤沢で女体曲線を強調した。陵辱心をそそられたのかのように、触手の群れが向きを変え、少女

のひとつしかない尻穴に殺到する。
「だ……だめっ、イっひゃう……おっ、オシリで……イっちゃいますぅう！」
容積以上の異物が肛門に潜り込んで激しくのたうち、半剥けのお尻が突発的にブルッと震える。快楽電流が弾けて粘膜器官を焼き尽くし、牝痺れは脊髄反射で全身を走る。
引き攣る内股筋が鎖分銅を揺らした。
グチュッ！　ヌチュッヌチャヌチャヌチャ！　ヂュルヂュルヂュル！
魔物に存分に咀嚼されるセーラー戦士のアナルと。
「あっぁはあん！　ひや、はぁイク、ひ……きます、もぉ……ッ！」
感じてしまうオリオンムーン。絶望の淵に突き落とされた美少女戦士には、もう快楽に抗うだけの精神力は残されていなかった。自身の不甲斐なさと無力さを痛感し、心を弱くする。肛虐の快美に屈した肉体は、前兆の痙攣を走らせ、直腸に灼熱を滾らせた。
「ハハハ！　ケツの穴でイっちゃうなんて、はしたないな有珠宮さんは！」
投げつけられる言葉にも切り刻まれる。髪を振り乱して拒む首にも、触手はシュルリと巻きついて、乳肉を括らせ、汁みどろの太腿も捕らえたうえで肛門を穿った。
熱痺の暴れまわる腸筒がうねる。オリオンムーンは上体を反らして、そのつもりがなくとも体重を秘裂に集中させ、力のない相貌を屈辱の涙と悦楽の涎で汚した。
「あひぃいっ、い……いぃいいいいッ」

理性を砕いた法悦が脳を食らう。結腸孔を突き上げられた瞬間、頭の中で真っ白な火花が散り、月のセーラー戦士は甘美な肛悦に肉体を制圧された。

飛翔感に打ち上げられるようなアナル絶頂。

「んぁあはぁあああああああぁぁぁあああああああああああああ――――――！」

腸筒が収斂して異物を一気にひり出し、スクール水着の尻布を水風船のように膨らませながら、粘液を木馬と水平にしぶかせる。

ブチュリッ！　グチュグチュグチュッ、ビチャビチャビチャビチャビチャ！

女壺の噴水も股布を逆流し、尻の側から水着を抜けて放射状に飛び散っていく。

「はぁあああああ……！」

オリオンムーンは自覚なく恍惚の笑みを浮かべ、スクール水着が熱いとろみで浸されるのを心地よくさえ感じた。触手が薄生地から抜けても、汁は残ったまま、ぶるぶると両肩を打ち震わせて甘い吐息を漏らす。

「んふ、あ……あはぁああ……！」

蕩けるような肛悦に双眸は惚けてしまって、瞳の潤みが頬に零れた。可憐な唇を台なしになるまで緩めて、舌をのたくらせ、溜まった唾液をかき出していく。排泄時に独特の異臭に肺を満たされたが、嗅覚がまるで働かず、においは感じられなかった。

（あ……ぅ、ふぅ……？）

『Act.4　魔性の嫉妬』より　その１

「朝霧さん……おっ、俺も、朝霧さんにして欲しい！」
「ち、ちょっとやだ――むぐう⁉」
唇を強引に割られ、ふたつの怒張に舌をグニュウと挟まれる。
その瞬間、女核の蕾で悦痺が連鎖した。
（ど……どう、なって……？）
快絶に頭を打ち貫かれて視界がぐるんと旋回する。
優夏のクリトリスはこの場にいる男子すべてのペニスと感覚を共有する。すなわち扱く数に比例して刺激も増幅するのだ。
八の字で膝立つ姿勢に疲れた脚が、頻繁に引き攣り、股布の両脇から太腿を舐めるようなエキスを垂らす。狂おしい痺れに身悶えて腰を捻れば、紺一色のスクール水着が、ヌラヌラとした潤沢を水面のごとく移ろわせる。
（だ……だめ、こんなにきちゃ……あっ、あたし……！）
しこったクリトリスが電気の糸で括られたかのようにビリビリした。脊髄を走り抜ける快楽電流が脳に食らいつく。
「んむ……っぷぁはあ！　ひぁ……はぁぶっ！」
牡肉を吐き出しても貪欲な舌を止められず、優夏は両手で肉茎を握り締め、唇の手前で二本を直線状に向かい合わせた。

亀頭と亀頭の隙間に舌を挟んで擦り立てるダブル・フェラチオ。
「むぢゅっ、んう……ひはぁ、らめ……ぁぐ！　ち……ひがぅ……の、っおむう！」
腐肉に唇を裏まで吸いつかせ、しょっぱくなった唾液を回収する。好きでやっているのではない、はずなのに、肉体は裏切って牡肉を熱烈にしゃぶりまわす。
乱れたショートヘアが肉茎にもつれるくらい近くに掴み寄せ、のたくる舌で両方の下の世話をするすべてを、クラスメートに披露してしまう。
「すげえ、朝霧さん……朝霧さんが、俺のチンポ……はあ！」
「そんな美味しそうにしゃぶられたら……っあ！　き……気持ちいいッ！」
辱められるセーラー戦士を優越感たっぷりに見下ろすクローネが、暗示めいた声で男子生徒の言葉を繰り返した。
「ほぉんと、美味しそうねえ……いやらしいカオ」
「おい……っひぐ、ぉご、なんか……」
目尻の角が立たない。眉を引き締めることもできない。顔中の筋が弛緩して、表情は虚脱し、淫蕩な笑みに崩れそうになる。
（こん……なの、美味しく……なん……か……）
無意識に優夏は投げつけられた言葉を反芻していた。本当は美味しいのだろう、と問いかけられるような気がして、頷きそうになる。

「んふぁあっ！　ぁぷ……あむぐ！　らめ、ち……ひがぅから……」
生臭さとしょっぱさがない交ぜになったペニスを舐めるたび、快美感が鐘の音のように身体の中で反響した。
「おいひぐ、も……気持ち、よふも……おっぐ、ない、いっひぐッ！」
しどけなく開いた唇に牡肉をふたつも押し込まれ、呼吸に詰まって小鼻をすすると、牝を酔わせる原始的な性臭が直撃して頭がくらっとする。
心ならずも優夏は、意志の弱くなった瞳にうっとりと艶を浮かべて周囲のクラスメートを一瞥した。女子は軽蔑を露にして絶句し、男子生徒は誰もが水泳パンツを突き破らんばかりに股間を膨らませ、獣欲に眼を血走らせる。
フェラチオショーは同世代の男子にとって刺激が強すぎた。
「俺も……も、もぅ我慢できねえ！」
ひとりが脱ぎ出すや、芋づる式に他の男子生徒もパンツを降ろす。青空の下で醜い勃起ペニスを並べて、連中は欲情を隠そうともせず、淫らな水着姿の少女に向かって競いあうように手淫を始めた。
「すげえよ、二本も一緒に……朝霧さん可愛いのに、こんな、エロ過ぎて！」
それもみるみる距離を詰めて。オリオンサンズの視界を埋めるように群がり、ついには少女のセーラー服をいきり勃つ剛直でまさぐり始めたのだ。

「俺のも、朝霧――優夏ちゃん、俺のもしてくれよ？　ほら！」
「やめ……むぐぅ！　近ぅけはぃでっ、はぁぐ、んぁむ……ぉおぐッ！」
脇腹を、腕の隙間を、複数の男根が無遠慮に出入りする。同世代の男子が曝け出す暴虐性に優夏は戦慄し、碧玉色の瞳に怯えの涙を浮かべる。
しかしほの赤く染まるまで上気したアクメ顔では、潤いを増したまなざしも、牡の劣情を煽り立てるばかり。
「おねはぃ、ンっ、だから……みんな、もぉやめっ、えお！」
「わかってるって、俺のも欲しいんだろ？」
まるで自ら欲しているかのように受け止められ、青臭いにおいを蓄えた肉棒で、濡れたショートヘアを梳かれるおぞましさ。年頃の少女が気を遣う髪だからこそ、性欲のはけ口にされ、穢されていくのを実感させられる。
そのうえクリトリスを感覚的に引っ張りまわされるのだ。
「だめ――あはぁあああッ⁉」
十数人分の力強い男性手淫の握力までが、魔法を媒介に粒身を扱き出す。潰されそうな力で肉豆の皮を繰り返し剥き戻される。セーラー服やらスクール水着やらを徘徊するペニスもシンクロして、衣擦れの摩擦にも襲われた。
昨日今日の陵辱で浴びせられた液体がプールの水と混ざり、スクール水着がぬかるんで

いく。ねっとりとした自分の肌もクリトリスで感覚させられる。
（いや、こんな……）
大勢の男に囲まれて犯されるのは嫌だ。しかし二本のペニスで口枷をされては、抵抗の言葉もままならず。
「あぶ！　むぷぅ……んぐっおう！」
心臓と肺が発作同然に呼吸を切迫させ、肉体を真っ赤に熱化させる。
クローネがオリオンサンズの飾り布を手に取り、適当な男子の怒張に被せた。
「こうするともっと気持ちよくなるわ？」
「は、はいっ……先生、はあ、すっ、すごいです！」
別の男子も、もう一方の帯を拾って逸物に括り、手筒を上下にスイングさせる。湿った衣の感触がクリトリスで強くなる。
電気の突き刺さるような刺激が肉豆に集中し、凄烈な法悦を食い止められず、昂る肉体は甘い痺れを漲らせた。
「あぐぅう！　むぷっ、ン……んひぐう！」
肉悦の奔流に押し流されるまま、眼の前で向かいあう怒張をギュッと握り、赤腫れた頭頂を丹念に舐め尽くす。涙交じりの春声と涎をひっきりなしに漏らして。
「んくっ、もお……もぉらめ……はぁ、あ……んぁふあ！」

舌を返した分だけ、女核が熱くぬめった摩擦感に包まれる。剥き身の快楽神経を熱痺で焼かれ、甘い快感は全身に悦びの波紋を広げる。

淫らな気配は脳裏にも立ち込め、熱い涙で揺らめく視界に桃色の霧がかかってきた。息を継ごうとするたび、最大限に嗅覚を駆使してしまって性臭にも酔う。

（と……とまん、ない……どうにかなっちゃう……！）

痺れに屈して背をのけぞらせると、小振りな胸が反れ、硬くしこった乳芽もスクール水着の裏と擦れた。ずぶ濡れのセーラー服に水着の紺色がうっすらと透ける。

男子一同の手淫が加速するにつれ、腫れたクリトリスも巻き添えを食らって苛烈に扱き抜かれた。自分の意志が少なからずこもった口奉仕も速くなる。

（どう……に、か……して……）

無理矢理やらされていたはずが、自ら望んでやっているかのような錯覚に陥り、閃く快感をもう一度だけ、という妥協を無限に繰り返す。

拒絶のつもりで男子を見上げても、艶を帯びたまなざしでは、涙を溜めるほど、彼らの嗜虐性をかえって触発してしまった。

「違ぅ、の……んぶ、あたひ……んぐっ、はむぢゅう」

手淫に耽る男子の脂ぎった視線が少女の心に羞恥を刻む。恥ずかしさにも鼓動のペースが上がり、「見られる」という刺激にさえ性的興奮を鼓舞される。

（も……もぅ、だ、め……）

初心な肉体を発情の血潮が循環する。

女の白濁がスクール水着の水抜きと股布の両端から漏出し、裸の太腿をトロトロと伝い落ちた。目の前の亀頭を舌で弾くごとに、お尻が跳ねるように震え、優夏は括れの浅い腰を波打たせて悩ましく身悶える。

セーラー服の裏では小振りな双乳が弾む。

「本当に美味しそうにしゃぶるわねえ、あなた。そんなにオチンチンが好きなの？」

ペニスは苦くて生臭いはずなのに。舐めれば舐めるほど旨味が濃くなり、腐臭も当たり前になってくる。

「そんな……あぐぃ、わけ……おっむぐ！」

「嘘おっしゃい。だったら、そんなにしゃぶったりはしないでしょう？」

涎を垂らして裏筋に舌を這わせ、窄めた唇で張り出たエラをチュウッと吸う。二本の男根が決壊気味にカウパー腺液を先走らせた。

ヂュルッ、ヂュルン……チュパッ！　チュパチュパ……ヂュルルルッ！

それをすすりあげ、唾液と混ぜ合わせたら歯の裏に塗りたくる。破廉恥で派手な吸い音に男子生徒全員の興奮は最高潮に達し、手淫のスピードが恐ろしく上がった。

「俺、もう……はあっ、もう出そうだ！　優夏ちゃん、俺のも水着で擦らせて！」

「あむうっ、はぐぅ――んぁむぷうッ⁉」
硬く握りやすいペニスでこそ可能な、男子一同による苛烈な握力と摩擦の反復が、小豆サイズの女核に集束されてしまう。クリトリスが爆発的に過熱する。
秘裂から肉芽を摘み出されるかのような刺激に、優夏は息を乱して、ビクン、ビクンと腰を打ち上げ、淫欲のまなざしを虚空に彷徨わせた。
「うふふっ！　もうイク寸前ってカオね、チンポにまみれてイきなさい！」
嘲り笑うクローネに反抗ひとつできない。
（……クローネ、なんか……に……）
屈辱と怒りは失速し、亀頭に挟まる舌をネチャネチャとのたくらせては、男子を真似てハンドシェイクも。汁の類が滲むグローブに皺を作り、手首を返して肉根を扱く。
「おもっ、んはあ！　こぅなのイっちゃ……むぐ！　んあぁぷ！」
無数の握力と摩擦に押し揉まれる性感の蕾を、舌のぬめる感触が柔らかく包む。肉豆を中心に電流が迸り、肉棒をより強く握らないと、腰が跳ね上がってしまいそうだ。重心がふわりと浮き上がり、反らせた背筋でスクール水着を弓形に引き伸ばす。
脳裏の混濁すべてを真っ白な快美感で洗い流された。
「んぉぐ！　むぶぅ！　はぢゅうッ！」
男子の手淫を超える速度で二個の亀頭を舐めまわし、膝立ちの姿勢で器用に空腰を打ち

ながら、痺れの臨界まで一気に駆け上がる。
「びりびり……はぁぶっ、きへるの、もっ、もうあたひ、ぉご！」
充血を極めたクリトリスで電圧が弾け飛んだ。股布の裏の女穴が、吐くような潮噴きで股間一帯を熱し、スクール水着を一度に潤す。
「イクッ！　ひくイぐっ、い……いっちゃやぁあああぁぁぁあああ――――――！」
優夏は股座を飛翔感に打ち上げられ、甘美な悦楽の波に飛び込んだ。重たい沼から四肢を解放されるかのような、疲れ果てた肉体には優しすぎるオーガズム。澄み渡る恍惚感に頭の中が蕩けてしまう。
スクール水着に擦りつく男根が次々と液の精子を放った。
ビュクビュクビュクッ！　ドビュッ！　ドクン、ドクン、ドクン……ドクン！
口の中に強烈に苦い汁を注ぎ込まれ、蒸せた腐臭が鼻に逆流する。髪をくぐった数本も白弾を撒き散らし、少女のあどけない相貌を濃厚なスペルマで淫靡に彩った。
そこまで汚されているのに、心地よすぎて達したまま降りられない。優夏は牝が本能的に浮かべるいやらしい笑みでエクスタシーに陶酔していた。
愛らしい小顔はスペルマまみれ。
「んふあ……あ、あはぁあああ……！」
肉花弁が蜜を小水のように漏らして股布を潤す。自分の体液も異常に熱い。

吸水性の高いスクール水着は、浴びせられたゲル状の腐粘液を吸収し、肌にべっとりと粘着した。セーラー服も濃厚な白濁で色彩を滅茶苦茶にされ、青臭い陵辱液は破れた網のように少女の肢体に絡まる。

肉茎を握ったままの両手は肘まで汚濁を滴らせた。八の字に痺れっ放しの瑞々しい太腿を、夥しい量の牡汁がゆっくりと垂れ落ちていく。

うなじに髪を粘りつかせて空を仰いだオリオンサンズは、放心し、余韻の揺りかごに身体を揺すられながら、全員の射精が終わるのを待った。

「んあ、はぁ……あ、あぁ……？」

それからお尻をプールサイドにぺたんと下ろす。口の中には鼻に逆流するほどの腐粘液がなみなみと溜まって、唇の両角からとめどなく零れ、一回の呼吸もつらかった。

「ぐ……ぅ、はあ……」

クリトリスがジンジンと腫れて痛いくらいだ。強すぎる官能に憔悴し、重たい倦怠感から四肢を抜き出せない。意識は泥の深いところを迷うかのようだ。

クローネの命令はあたかも暗示のごとく頭に響いた。

「そんなに零しちゃって、もったいないわね……そうだわ、お口に溜まったの、お友達の有珠宮さんにも呑ませてあげなさい？」

「ぁ……お、い？」

『Act.4　魔性の嫉妬』より　その２

「あ……ぃ、いえ……その……これは」
しかも水に濡れたばかりでうっすらと透けてしまっているのだ。白タイツも同様で、着衣感こそあるものの、視覚的には生地の有無が難しい。これでは腰から下をありのまま露出させているのも同然である。
それも、学内でも有数の豊満な肉体が見せる水着姿。男子だけでなく女子にもしげしげと女体曲線を観察される。
半透明のスクール水着が液濡れの潤沢で光を弾いて、胸とお尻の谷間に食い込み、葵のエロティシズムを明らかにした。
たわわに実った双乳は大きすぎてセーラー服の形が崩れそうだ。環視を意識して、胸を見られまいと鎖骨の下を押さえても、逆に膨らみを強調してしまう。八の字の両肩をちらりと覗かせる挑発的な格好はじっとしているだけでも悩ましい。
巨乳の重量に牽引されて、肩を上げ下げするのも、臍の縦筋を薄生地に浮かせた柳腰をクイッと捻るのも。
（や、やですわ……こんな格好を……）
そのつもりがなくとも肉体は蠱惑性を高め、観衆の眼を片っ端から引きつける。葵は羞恥に鼓動を速くして頬をぽっと赤らめた。
厚みがあって形も熟れた林檎のように流麗なお尻がぷるぷると震える。ムッチリとした

肉感の太腿は眩しく照り返るくらい肌白い。プールから上がったばかりの肉体を無数の雫が流れ落ちる。

ピンク色のハイヒールで踵を斜めに押し上げ、薄タイツで引き締められた伸びやかな脚線にも、無数の視線は舐めるように徘徊した。恥辱の袋小路に追い詰められる。

ミッドナイトブルーのロングヘアだけが身を隠す頼りだった。乱れた髪に手櫛を入れて肩の前にも流そうとする。しかし動揺のせいで髪を上手くほぐせない。むしろ細身に絡みつかせて、流れる水滴の数を増やし、スクール水着を暇なく濡らしてしまう。

涙腺が緩み、トパーズ色の瞳に熱いものをじわりと滲ませた。

「み……見ないでください……」

美眉が脇に傾いて困惑を浮かべ、慎ましやかな令嬢の恥じらいを豊かに表現する。誰の眼にも葵が極端に恥ずかしがっているのは明らかだ。

「あの有珠宮さんが……こ、こんなエロいカッコで、朝霧さんと？」

ゴクリと男子の嚥下が聴こえた。

クラスメートの反応を気にして、アルカナの隙間をちらりと窺えば、鏡に映った「有珠宮葵」も全員一斉に瞳を転がす。

（きゃ……っ！）

まるで自分自身に見られるかのようだ。裸よりも淫猥かもしれない格好で、衆人環視に

恥ずかしがる自分を、自らまじまじと眺め、羞恥の炎に油を注いでしまう。「見られる」という刺激が物理的に感じられるほどにまで増幅される。
ヌチャッと肉花弁で湿った悦感が生じた。思いもよらない生理現象に声がうわずる。
「あ……ひぁう？」
プールの水とは異なる女の体液がクロッチに染みていく。粘着感が強くなる。
鏡の一枚をのけたクローネが心の中を見透かすように囁いた。
「恥ずかしいところを見られてないと興奮できないのよね？　うふふっ、鏡の前でどんなオナニーをしているのかしら」
「そっ！　……そんな、鏡の前でなんて……しませんわ」
「あぁら？　オナニーはご存知のようね」
答えてから口を噤むも遅かった、生徒の間に秘密が知れ渡ってしまう。
「有珠宮さんも、お……オナニーとかするんだな」
自慰の知識こそあっても、回数は指で数えられるくらいでしかなく、いやらしい気持ちで始めたことは一度もなかった。しかし経験の有無を皆に知られたうえ、この状況で真実味のある嘘をクローネに添えられては。
「さっきも、朝霧さんにオナニーの仕方を教えてあげてたんじゃなくて？」
「ち、違います！　私は……」

まるで毎晩のように繰り返しているかのように聞こえる。級友の疑惑のまなざしが、男子は下世話な色、女子は軽蔑の色に変わっていった。

これまでは模範的な優等生として、誰からも頼りにされてきたのに。自慰に耽るどころか、友人に猥褻の指導までする痴女と誤解され、向けられる視線のすべてが冷たい。

アルカナが間隔を空けて葵に道を作った。その先にはオリオンサンズ。

「そうだわ、ここで朝霧さんに続きをしてあげたら？」

失神に近い状態で倒れている彼女を、クローネが持ち上げ、葵に向かって尻を突き出す姿勢に起こさせる。

それからクローネは指先で魔法を飛ばし、オリオンムーンの股間を直撃した。

「あうっ⁉」

もぞもぞと蠢くような違和感がヴァギナで膨れ上がる。何かを仕掛けられたという危機の気配がいっそうそれを感覚させる。

圧迫感が生じ、クロッチがもっこりと膨らんだ。

「ひやっ、な……なんですの……？」

感覚的にはクリトリスに違いない突起が、風船のごとくみるみる膨張し、スクール水着の水抜きを突き破るように抜けて異様を現す。

葵は瞳を強張らせ、クラスメートも開口して眼を白黒させた。

「――――――!?」
内臓を連想させる不気味な血管を浮かび走らせ、臍に向かって反り上がった頭部の皮を剥いて、真っ赤に腫れたのは肉太の勃起。空を仰ぐアザラシのような形状で、天辺では小さな割れ目が蜜を滲ませている。
これではまるで。
「愉快なオチンチンね。どうなってるのかしら？」
「！　ち……違います、これはあなたが」
魔法で作られた偽物のペニス、など説明のしようがなかった。そもそも「男根」をどう言葉にするべきか、育ちのよい葵にはわからず、生徒の解釈のほうが現実味もある。
「もしかしてアレが……さ、さっき先生が言ってた……作り物、とかいう？」
「いくらなんでも、で、でかすぎるだろ……」
男子も唖然とするほど、令嬢の逸物は巨大で、大量の血液を漲らせ、遠目にもわかるほどビクンビクンと脈打った。
自分の股間でいきり勃つ肉棒に顔から火が出そうな羞恥に襲われ、葵は涙を隠すように両手で顔を覆った。指と指の間に瞳を忍ばせ、擬似ペニスの様子を窺う。
今すぐにでも蹲って股間に両腕を差し込みたかった。
「や、こんな変なモノ……あッ!?」

が、クローネの伸ばした魔法の糸に剛直を軽く牽引されるだけで、下肢を狂おしい痺れが駆け巡り、隠すつもりが、むしろ自ら爪先立って衆目に晒してしまう。

恥ずかしいのに。見られたくないはずなのに、処女のヴァギナが淫蜜で熱く潤う。

（カラダが……熱ぃ……どう、してですの）

三百六十度の環視という、見られる刺激の興奮に肉体はゾクゾクと打ち震え、正直に甘蜜を湧かせた。

（力が抜けて……？）

恥ずかしがる顔を見てくださいとばかりに両手を頬から剥がし、だらんと左右に垂らす。爪先でアンバランスに立って動くに動けず、肥大化して重たくなったクリトリスを、小魚のように跳ねさせることしかできなかった。

クラスメートの熱視線に身も心も焼かれる。鏡の枚数と同じ人数の自分が、病的な痙攣を走らせ、しどけない唇から色めいた吐息を漏らす。

「はあ……くう、私に……何をしたのです？」

「あら、大きくしてあげただけよ。ここまで敏感だとは思わなかったわ」

魔法の糸に引っ張られるまま、逸物を先頭に鏡の間をよろよろと歩いていく。ハイヒールの踵を立てて踏ん張っても、歯を軋ませても、クローネが軽く手首を返すだけで、葵の抵抗は水泡に帰した。

「やめっ、うぐ！　……んあッ！」
一歩進むごとに肉茎で高まる電圧に動悸を起こし、鏡面で反射するクラスメートの好奇の眼に心は萎縮する。
先にクローネがオリオンサンズの股間をまさぐって、八の字に開脚させ、股布を右から左へと剥がした。クラスメートの見守る中、それも空の下で公開されてしまった優夏の大事なところ。淫猥な気配を漂わせる入り口が若い男子の眼を釘付けにする。鏡の乱立するプールサイドでこれからの淫行を疑う者はいなかった。
葵の巨木と優夏の女穴が魔法の糸で結ばれる。クローネが手を放すと糸はみるみる短くなっていった。
「きゃっ⁉　クローネ……今度は一体」
「うふふふ！　私の代わりにオリオンサンズを苛めてもらおうかしら」
あと二歩、あと一歩と近づいて葵は絶句する。見ないようにと避けていた親友の凄惨な姿を、青臭い精液で汚されたオリオンサンズを目の当たりにして。
汚いから見なかったのではない、彼女はきっと見られたくないだろうから。
「あ……あぉ、い……はぁ、見ない、で……」
意識はあるらしいが声はうわごとも同然である。それでも肉穴は呼吸でもするかのように、浅い開閉を繰り返し、薄紅色の肉羽根を滴らせた。

巨根のせいでバランスを保っていられない葵は、プールサイドに膝を立て、成人の男性以上に雄々しい怒張の高度を優夏の入り口と合わせた。
「さあ有珠宮さん、自慢のオチンチンで朝霧さんを気持ちよぅくしてあげなさい！」
「まっ、待って――んぁあああ⁉」
相手の狭穴には太すぎる、焼けた鋼のように熱くて硬いペニスを、オリオンムーンは勢いに乗せてズブリと挿入してしまう。
悦痺れが脊髄へと突き抜け、反射的に背がのけぞる。濡れているにもかかわらずロングヘアが翻り、跳ねた毛先から水滴を散らす。
「あ……あっ、んあっく、ぅくう？」
葵は優夏の尻に両手を突っ張り、柳腰をぶるぶると震わせた。女は決して経験することのない挿入「する側」の快楽が処女の脳を襲う。
（と……止まって……！）
強制されたものでなければすぐにも腰を引いている。神経がのたうつような快感に肉体が過熱し、発作的な喘ぎを起こす。
「はあっ、あぐ……う！　んあぃいいい……ッ！」
暴れる心臓に打たれて美巨乳が揺れ弾む。
香汗の分泌さえ感覚できるほど、あらゆる刺激に敏感になり、乱れた髪を伝ってプール

の水が流れるだけでもゾクゾクする。
二枚の陰唇が左右から亀頭にしゃぶりついて幹を這った。吸いつく穴の中では、肉襞が蠢きを波打たせて奥へ奥へと肉棒を運ぼうとする。
ズチュッ……ヌチュ、ズブズブズブ！
呼吸一息のわずかな緩みだけでも果ててしまいそうだ。唇をわななかせて無意識に涎を垂らし、初心な肉体は挿入感に屈服する。
狭さを太さで無理に押し拡げるがための圧力が生じ、締めつけも苛烈だ。張り詰めた亀頭表面に粘膜襞が、隙間を埋めるように密集して、雁首の溝を穿り、肉茎を根元に向けて扱き降ろす。
杭を打ち込まれる優夏は声も掠れてつらそうだ。
「あ、あぐ？　葵、やめ……て」
サンズ陵辱の片棒を担がされてしまう。
「違ぅんれす、はあ、優夏ちゃん……私、んっふ――ひぃあ！」
しかし四肢が痺れて止められない。とうとうペニスを根元まで深く埋没させて、紺色のスクール水着に純白のスクール水着が密着した。優夏の火照ったお尻の熱が薄生地越しに伝わってくる。微弱な震えまでも。
下半身の結合に悶えるふたりのセーラー戦士。

「だ……だめ、葵……こ、こんなの……ひぁぐ、アソコが……巻かれひゃう……！」
「ゆっ、優夏ちゃん……んふう、はぁ……んはあッ？」
オリオンムーンはサンズのお尻にしがみついて、不規則に数秒に一度は熱い喘ぎを吐き出した。口移しされて残っていた精液が、今になって急に苦くなり、粘液の存在たっぷりに舌にねとつく。それが呼吸をいっそう苦しめる。
足元にも巨大化されたアルカナの鏡面が浮かび上がった。
「さあ、お友達にもじっくり見てもらいなさい？　アソコがどんな風になってるか」
これでは肉交の合わせ目が鏡に映って丸見えだ。痛々しいほど拡張した女穴に深々と挿さった太幹も、両脇にまろび出た優夏の肉唇も、鮮明に映し出される。
どちらの発情汁も鏡面に雫を落とす。
クラスメートは押し黙り、葵の一挙手一投足を凝視した。燃え上がる羞恥が美少女戦士の心をますます弱くする。
下半身を穴でだけ巨根に持ち上げられて突っ伏す優夏が、苦しげに呻いた。
「あ、葵……抜ぃ、て……！」
魔法による牽引はもう感じられなかった、すぐに腰を引こうとする。けれども。
「はあっ、はい、優夏ちゃ――ひやあ？」
肉厚の傘が膣筒から摩擦を最大限にかき集めて、強い痺れを起こし、それ以上の快楽に

竦んだ葵は亀頭を元の位置まで押し戻してしまう。
「ぅく！　あ……葵？」
「ごっ、ごめんなさい……はあ、すぐ……抜きますから」
恐る恐る、快楽電流が生じないよう今度は慎重に。休憩を挟んでは息を止め、奥歯を噛み締めて巨木を引きずり出す。しかし刺激が弱ければ弱いほど、無性に勃起を擦りたい衝動に駆られ、息継ぎも困難なくらい煩悶とさせられた。
（わ……私？）
逸物に刺激を与えたい強迫観念を振り払えず、頭蓋が過熱する。掻痒感が剥き身の亀頭をわらわらと這いまわって堪えられない。そして魔法で操られてはいないのに。
「優夏ちゃん……わ、私……んくふう！」
「ひあっあああ!?」
外れかかったペニスを、葵は再び肉壺の中へと押し込んでしまった。快美感に心ならずも屈し、精液で青臭くなった涎を、緩んで戻らない唇の両端からしとど垂らす。
気持ちよかったのだ。
「ごめんなさぃ、はあっ、優夏ちゃん……私、と……止められ、なくて……！」
頭では自分が優夏を苦しめていると、わかってはいるつもりでも。
ヌチュヌチュ……ズチュンッ！　ヌチュヌチュ、ズチュンッ！

ロングヘアをかき混ぜるように細身を下から上へと波打たせ、角度の硬くついた肉根を前後に抜き挿しする。純白のスクール水着を纏って濡れた肉体に、ミッドナイトブルーの髪をさらに巻いて葵は、狭苦しい淫穴へと続けざまに太幹を押し込んだ。

「んぁっはあ、んふう！　はぁ、だ……だめです！」

「待って、裂けひゃう……ひや、あっうあ」

優夏が抵抗の色を浮かべても、指が食い込むほどお尻を掴んで、快感の波が途切れれば自ら腰を進めて求めてしまう。弾む巨乳が下半身のスイングに反動を持たせ、たわめられたバネが跳ねるような瞬発力で律動を加速させる。

着いては離れる二色のスクール水着が粘着質の糸を引いた。

（と、とめなくちゃ……あっ、あぐ？）

止めようとすれば、全身が恥汗を湧かせて憔悴し、苦しい動悸に陥る。

「はぁ、んひや……ゆ、優夏ちゃん……んはあッ！」

刺激がないとどうにかなってしまいそうで、せっかく途中まで引きずり出したペニスをまた根元まで打ち込む。そのたびに、排尿の生理に似た熱い滾りが肉の芯に集中し、膝で立つ下半身を敏感に打ち震わせる。

「あ……んぁあああ……！」

作りの端整な相貌は羞恥と官能の赤に染まって、潤んだ瞳はうっとりと艶を秘め、眉も

唇も使い古したゴムのように緩んでいた。力弱い眉の下で瞼が半分閉じて、睫毛を降ろし、拒絶とも歓喜とも区別のつかない涙を零す。

いやらしい本性を表情豊かに浮かべる顔は四方の鏡に映ってもいた。みっともない涎を拭うこともせず、一心不乱に肉棒を抜き挿す姿がありありと。

「有珠宮さんが……あ、あんな……変態じゃないの？」

「すげえよ、有珠宮さんも……ハアッ、ハア！」

女子は慄いて後ずさるほどの。男子は衝動的に手淫を再開するほどの。

それでも葵は優夏を相手に膣内往復をやめられなかった。

「ひはあっ、ゆ……優夏ちゃん、んあ、ごめんなさぃ……私……ッ！」

甲高い恥声を響き渡らせ、言葉では謝罪しながらも、残った力のすべてを反復運動に集中させる。角張った亀頭冠でゴリゴリと膣筒を穿り、群生する肉襞を攪拌する。

前後に直線的でしかなかったストロークも、回数を重ねるごとに巧みになり、剛直の側面を交互に擦っては、一回の往復で最大数の膣襞を巻き込めるように捻りも加えた。

悦痺がこそばゆく走り、肉根はより強い快楽を求めて疼く。

「葵……ぅく、待って……あぁ、イっひゃう……また、んふ……ぁああ！」

痛がっていたはずの優夏も、次第に葵と喘ぎをシンクロさせ、ぬかるんだ女壺で葵の勃起を苛烈に食い締める。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/